

【研究ノート】

## 未来の学びと SDGs ——Project-based Learning の開発——

荒木 貴之

Musashino University Creating Happiness Incubation 研究員 武蔵野大学 教育学部 教授

### 要約

本稿は、武蔵野大学附属千代田高等学院において、主として2019年に取り組まれたSDGs（Sustainable Development Goals）に関連した実践について、国連グローバル・コンパクト（UNGC）が定めるCOE（Communication on Engagement）の4つの評価の枠組みを用いて総括したものである。同校、および同校と武蔵野大学工学部環境システム学科との高大連携事業で展開されたSDGsに関する実践は、UNGCが定めたCOEの4つの評価の枠組みから見ても高い水準で達成されていることが示された。今後、SDGsに関連した実践研究を進めることは、中等・高等教育でますます導入が図られるであろうProject-based Learning（課題解決学習）の開発の一助となることが予想される。

### 1. はじめに

SDGsとは、Sustainable Development Goalsの略語であり、「持続可能な開発目標」と邦訳される。SDGsは、2015年9月に開催された国連総会で「持続可能な開発のための2030アジェンダ」として、すべての国と地域により全会一致で採択された。「No one will be left behind（誰一人として取り残さない）」を理念に掲げ、2030年までにすべての国と地域が取り組むべき17のゴールと169のターゲットから構成される（図1）。SDGsの特徴としては、普遍性、包摂性、統合性およびパートナーシップが重視されていることである。

小村・金井（2018）は「これからの教育とSDGs—生徒がエージェンシーを発揮する学びとは」という論考の中で、わが国の学校ではSDGsを意識した学習活動の展開や、SDGsのような人類共通の課題に取り組むプロジェクト学習（Project-based Learning）が増えつつあると指摘している。

武蔵野大学においては、2019年3月20日に西本照真学長から「武蔵野大学

実行宣言」が出され、SDGsが「いきとし生けるものが幸せになるために」という仏教の根源的な願いと軌を一にするものであり、SDGsの実行に向けてすべての学生と教職員を挙げて全力で邁進することが掲げられた。



図1 SDGsにおける17のゴール（外務省）

武蔵野大学附属千代田高等学院は、2017年12月5日に、国連グローバル・コンパクト（UNGC）への加盟が認められた（図2）。UNGCは、1999年コフィー・アナン国連事務総長がダボス会議で提唱し、2000年ニューヨークの国連本部で正式に発足したものである。UNGCは、各企業・団体が責任ある創造的なリーダーシップを発揮することによって、社会の良き一員として行動し、持続可能な成長を実現するための世界的な枠組み作りに参加する自発的な取り組みとされる。UNGCの特徴としては、国連が国家という旧来の仕組みではなく、民間企業／団体の主体的なイニシアチブ（取り組み・参画／関与）を求めたものであり、参加する企業側の背景としては、グローバル化・多国籍企業化・社会的存在感の増加につれて、従来は公権力領域であったグローバル課題への関心・関与意欲の高まりがある。

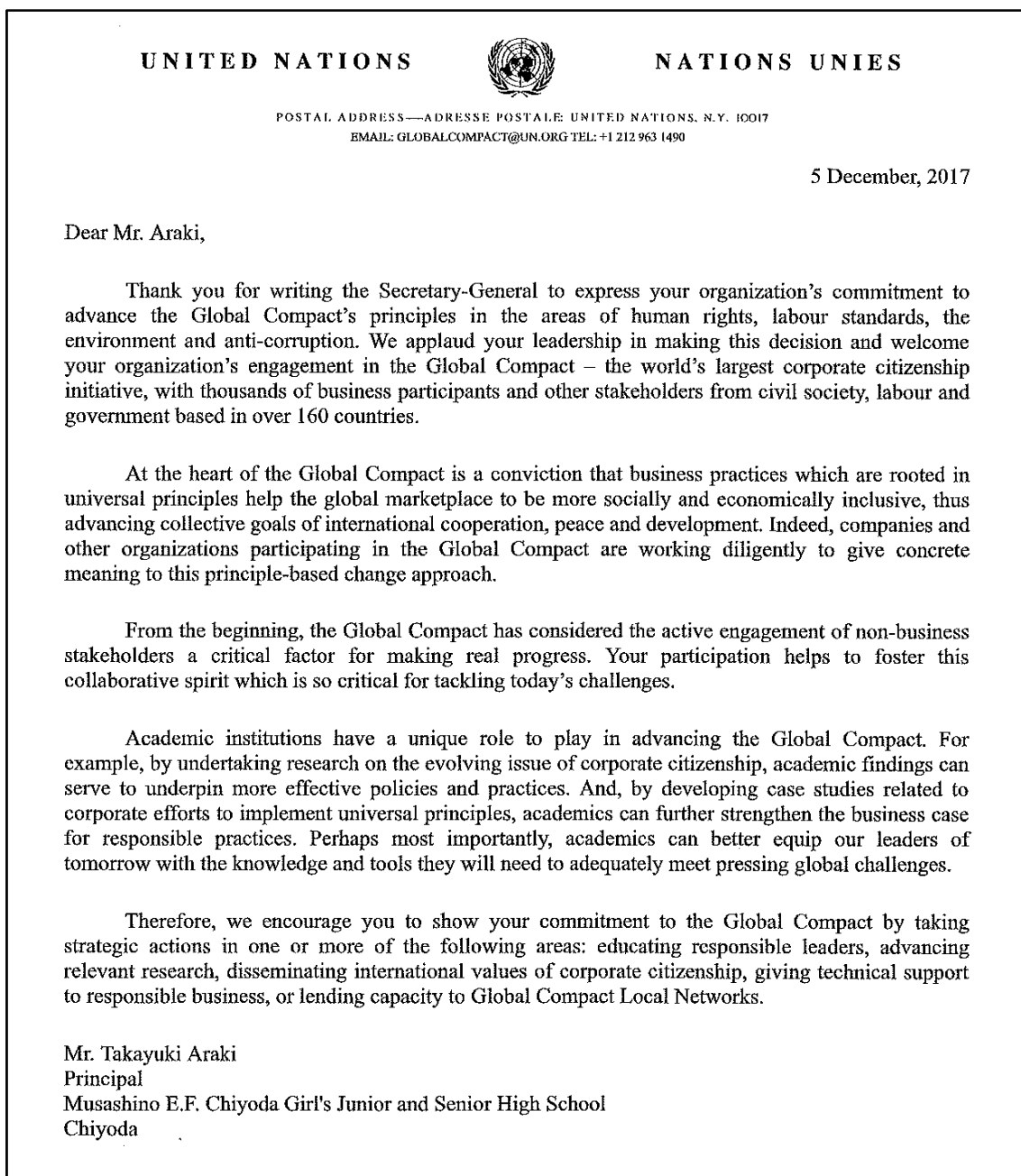


図2 国連グローバル・コンパクト（武蔵野大学附属千代田高等学院）

わが国における UNGC の下部組織である「グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン」(GCNJ) は、2003 年 10 月に国連広報センターによって「ジャパン・ネットワーク」という任意団体として設置され、2015 年 7 月に「グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン」として名称変更がなされた。GCNJ の加盟企業・団体は 2020 年 4 月 15 日現在で、357 企業・団体であり、

武蔵野大学附属千代田高等学院は GCNJ 内に設置された SDGs 分科会幹部となり、分科会の開催等を通して、「教育と SDGs」の普及啓発に一定の役割を果たしてきた。

表1 国連グローバル・コンパクト COE 評価の枠組み

(1) グローバル・コンパクトに関連するトピックについて教育を提供する
(2) グローバル・コンパクトに関連して応用研究を行い、新時代を築く考え抜かれたリーダーシップを発揮する
(3) グローバル・コンパクトの原則を広める
(4) 国連グローバル・コンパクトの参加企業による持続可能性と開示性の向上のための活動を支援する

UNGC に加盟する学術団体に求められる役割としては、グローバル・コンパクトの原則を団体の経営に取り入れ、COE 要件にしたがって、2年ごとに進捗状況を、UNGC 本部へ報告しなければならない。COE の評価の枠組みを表1に示す。

次章では、表1に示した COE 評価(1)から(4)の枠組みに従い、武蔵野大学附属千代田高等学院で行われた実践を概観することとしたい。

## 2. SDGs 実践の評価

### (1) COE 評価1

「グローバル・コンパクトに関連するトピックについて教育を提供する」

SDGs の17のゴール、169のターゲットの中で、とりわけ教育分野において注目されているのは、ゴール4「質の高い教育をみんなに」の中のターゲット7「2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。」である。

武蔵野大学附属千代田高等学院では、学習者への持続可能な開発を促進する

ために必要な知識及び技能の習得に関して、新入生生徒全員に円形の SDGs バッジを付与するとともに、新入生オリエンテーションでは、SDGs カードゲームや SDGs の 17 のゴールに関連する実践的活動を、教育交流協定を結ぶ東京都立八丈高等学校（2018 年度）および札幌新陽高等学校（2019 年度）の生徒とともに行った。また、武蔵野大学大学院教育学研究科の授業「国際教育研究 1」（図 3）は、プラチナマイスターアカデミーとの共催で実施し、SDGs に関連する内容で構成したが、武蔵野大学附属千代田高等学院内のアカデミック・リソース・センターで行われる授業は、高校生も参加可能な形の公開講座とし、生徒は興味関心に応じて大学院授業を聴講し、SDGs に関する知見を深めていった。



図 3 教育学研究科「国際教育研究 1」（2019 年度）

武蔵野大学附属千代田高等学院の学校全体の取り組みとしては、SDGs の 17 のゴールについて網羅的に学ぶ機会を総合的な学習の時間で設定した。学習成果物であるポスターは校内に掲示され、生徒や保護者、来校者に対する SDGs に

関する知識理解および普及啓発に一定の役割を果たした。

## (2) COE 評価 2

「グローバル・コンパクトに関連して応用研究を行い、新時代を築く考え抜かれたリーダーシップを発揮する」

この節では、武蔵野大学附属千代田高等学院と武蔵野大学工学部環境システム学科との高大連携事業について、論述することとしたい。

2018年12月、武蔵野大学工学部環境システム学科と武蔵野大学しあわせ研究所の共催により、「武蔵野大学鉱山プロジェクト」が始動した(図4)。このプロジェクトの目的は、金属の再利用を目的として、武蔵野大学の学生及び教職員から、不要になった小型家電を集めるものである。



**武蔵野大学鉱山プロジェクト**

不要な家電を 大学で集めて 工場で分解！ リサイクルして 金メダルに！

- ・どうやって捨てればいいか分からない、そんな家電が自宅にありますか？
- ・携帯電話や充電器、イヤホン等の小型家電を回収しています！
- ・回収した資源は東京オリンピックのメダルになります。

\* 回収場所 \* 武蔵野キャンパス 6号館1階  
\* 有明キャンパス 1号館1階

\* 回収時間 \* 平日 9時～17時

\* 回収期日 \* 平成31年1月31日(木)

← 詳細な情報はQRコードから！

共催: 環境システム学科 / 武蔵野大学しあわせ研究所  
問い合わせ先: [2030sdgs@musashino-u.ac.jp](mailto:2030sdgs@musashino-u.ac.jp) (環境システム学科)

図4 武蔵野大学鉱山プロジェクト

2019年1月には、武蔵野大学附属千代田高等学院が同プロジェクトに参加し、2月9日には環境システム学科の高橋和枝教授による高校生へのSDGsゴール12「つくる責任つかう責任」に関する授業が実施された。

武蔵野大学附属千代田高等学院の生徒会は、「都市鉱山からつくる！みんなのメダルプロジェクト」とし、ポスター（図5）と小型金属の回収バッグを製作し、校内および学校近隣のマンション等へのポスターの掲示と回収バッグの配布を行った。同プロジェクトで回収された貴金属類の内訳は図6の通りである。



図5 「都市鉱山からつくる！みんなのメダルプロジェクト」ポスター

●メダルプロジェクトで回収された貴金属類(千代田高等学院回収分)

品目	重量(kg)	金(g)	銀(g)	銅(kg)
PC	230	9.6	41.7	6.2
携帯電話	10	3.3	10.3	1.0
デジタル小電	10	0.2	2.1	0.6
その他小電	80	0.6	10.2	3.5
合計	330	13.8	64.2	11.3

※品目別の重量、金・銀・銅の含有量は計測値ではなく概算値です。

図6 メダルプロジェクトで回収された貴金属類

この武蔵野大学附属千代田高等学院と武蔵野大学工学部環境システム学科との高大連携事業は、環境大臣から表彰を受けるとともに、2019年9月18日には武蔵野大学のブランドステートメント「世界の幸せをカタチにする。」の実現に向けた取り組みに積極的に貢献したとして、Creating Happiness 賞を受賞するに至った。さらに、環境システム学科が主宰する「MUE Co-Creation Lab」に高校生も参画し、大学生と協働でSDGsに関連するワークショップや講演会を開催している。

### (3) COE 評価 3

「グローバル・コンパクトの原則を広める」

国連グローバル・コンパクトの原則（GC10）は10項目から構成される（図7）。GC10が依拠しているのは、「世界人権宣言」（1948）、「環境と開発に関するリオ宣言」（1992）、「労働における基本的原則および権利に関するILO宣言」（1998）、および「腐敗防止に関する国連条約」（2003）である。

人権		<a href="#">原則1：人権擁護の支持と尊重</a> <a href="#">原則2：人権侵害への非加担</a>
労働		<a href="#">原則3：結社の自由と団体交渉権の承認</a> <a href="#">原則4：強制労働の排除</a> <a href="#">原則5：児童労働の実効的な廃止</a> <a href="#">原則6：雇用と職業の差別撤廃</a>
環境		<a href="#">原則7：環境問題の予防的アプローチ</a> <a href="#">原則8：環境に対する責任のイニシアティブ</a> <a href="#">原則9：環境にやさしい技術の開発と普及</a>
腐敗防止		<a href="#">原則10：強要や贈収賄を含むあらゆる形態の腐敗防止の取組み</a>

図7 国連グローバル・コンパクトの原則（GC10）

UNGCに参加する学術団体の役割としては、GC10が依拠する国際的な宣言や条約等について網羅的に学ぶ機会を設けるとともに、教科の学習活動の特殊性や学校がもつ独自性を鑑みながら、「原則2：人権侵害への非加担」や「原則



7：環境問題の予防的アプローチ」など、比較的学校が取り組みやすいと思われる課題について、Project-based Learning の開発が求められる。

武蔵野大学附属千代田高等学院における GC10 に関連する取り組みの一例として、いじめは絶対に許さないということから「人権侵害への非加担」を、新入生オリエンテーションで取り組んだサボニウス型風力発電機の製作では、エネルギーについて考えることを通して「環境問題の予防的アプローチ」を行っていること等が挙げられる。

#### (4) COE 評価 4

「国連グローバル・コンパクトの参加企業による持続可能性と開示性の向上のための活動を支援する」

武蔵野大学附属千代田高等学院は、GCNJ 内に設置された SDGs 分科会において、2018 年度から 2 カ年分科会幹事をつとめ、分科会会場の提供や、参加企業から問い合わせがあった、教育分野への SDGs の導入や学校と企業との連携のあり方等について、助言を行ってきた。

2019 年 8 月 7 日には、SDGs 分科会に参加する 83 の企業・団体が参加し、「教育と SDGs」と題した分科会協議が武蔵野大学附属千代田高等学院で開催された。この「教育と SDGs」の分科会協議には、同校の生徒も参加し、グループディスカッションでは、生徒自身の SDGs に対する思いや取り組み、企業に要望することなどの意見表明が行われた。分科会終了後も、高校生との SDGs 分野での協働を希望する企業数社から、生徒への訪問が見られた。これらの活動は、企業による SDGs に関する活動の持続可能性と開示性の向上に役立ったと思われる。

### 3. 今後の SDGs 研究の展望

本稿は、武蔵野大学附属千代田高等学院において主として 2019 年に取り組みされた SDGs に関連した実践について、国連グローバル・コンパクトが定める COE の 4 つの評価の枠組みを用いて総括した。本論における評価については質的分析にとどまったが、今後の SDGs 研究の一つの方向性として、定量的な成果の測定をするための評価の開発が挙げられよう。

次に、教材論あるいは教科教育学の観点から、Project-based Learning（課題解決学習）の開発に SDGs が果たす役割を検討する必要があるだろう。小村・金井（2018）は、「知識を身につけるだけでなく、知識を使いこなし、どのように社会と関わるかを問うていく学びが重視されることで、SDGs を意識した学習活動や SDGs のような人類共通の課題に取り組むプロジェクト学習（Project-based Learning）が増えつつある」と指摘している。

本稿では、筆者の体験や生徒への聞き取り等に基づくエスノメソドロジカルな記述により、武蔵野大学附属千代田高等学院の SDGs 実践について振り返ることとした。今後、多くの学校で SDGs に関連する実践の蓄積がなされることにより、教材論あるいは教科教育学の観点からのアプローチに期待したい。

## 謝辞

本論文は 2019 年度しあわせ研究費特定研究（研究テーマ：ちよだ SDGs プロジェクト）の助成を受けたものです。

## 参考文献

荒木貴之・西田浩之・保坂朗子・林昂平(2019)「学校教育における SDGs を通した人材育成に関する考察」『武蔵野教育学論集』8, pp23-36.

外務省 JAPAN SDGs Action Platform

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/index.html> (2020.3.26.確認)  
グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン

<http://www.ungcjn.org/index.html> (2020.3.26.確認)

小村俊平・金井達亮(2018)「これからの教育と SDGs—生徒がエージェンシーを發揮する学びとは」『学術の動向』23(8), pp.38-43.

プラチナマイスターアカデミー

<https://platinum-meister.com/> (2020.3.26.確認)

武蔵野大学鉱山プロジェクト

<https://urbanmine.mu-projects.com/> (2020.3.26.確認)